



〇しんぶんし

上から読んででも下から読んででも「しんぶんし」、よくあることば遊びです。ここではことばのことではなく、新聞紙そのものの活用についてです。

私が高校生のころの弁当はアルミでできた箱型のものでした。それを新聞紙で包んで通学していました。その弁当箱は今のよう密閉性がなく、ふたをかぶせるだけの単純な作りだったので、少しおらずに水分が多いとよく新聞紙に滲みしました。ときには教科書やノートまで被害にあうことがありました。

弁当の話題ではありません。活用ですね。私は年賀状を毎年木版画で制作しています。彫刻刀で彫った版木にはがきをのせ、ばれんでこすって写し取ります。より鮮明に仕上げるためには、はがきを程よく湿らせておくとういことです。湿らせた新聞紙で包んでおくとう均一になじんでくれます。

このほかにも習字のときの練習にも使えますし、汚れ物を包んで捨てるとう周りに汚れが付きません。このように新聞紙はいろいろな活用ができる優れものですね。

このたびこども学科の2年生が総合研究Ⅰの授業で簡単なお話を演技で披露してくれました。その時の衣装は新聞紙で手作りしたものでした。4つの班がそれぞれに工夫を凝らして制作・演技をしていました。高価な布やアクセサリーを使わなくても、新聞紙の衣装は見る者の想像力に働きかけ、その場面の雰囲気醸し出してくれます。とくに子どもたちは“見立てる”ことをよくしますね。その物語の世界にすんなりと入り込んでいくことに新聞紙が役に立ってくれます。

物語は「森のくまさん」「大きなかぶ」「森のくまさんⅡ」「浦島太郎」でした。第1話は、くまさんに追いかけられ、女の子が落としたイヤリングをリスさんが見つけてくれるという、子どもたちがやさしい心を養っていけるものでした。やさしい松根君がリスになったのもうまい配役だったと思いました。第2話は、大きなかぶをみんなで引っ張るチームワークがダイナミックで動きがありました。衣装も凝っていて“帽子”もさまざまに工夫されていました。ここでおやじギャグ、「かぶの話だけあって、かぶり物が工夫されていましたね。」…すべってしまいました。第3話は、始まる前に樹木が立てられ、落ち葉が蒔かれました。簡単な舞台設定がなされたわけですが、その瞬間に森の情景が浮かんできました。小さい子どもたちならなおさら引き込まれたことでしょう。第4話は、誰もが知っている浦島太郎です。結末まで分かるものですが、この班は音響を活用していました。みんながよく知っている歌をBGMに使い、セリフも録音したものを使いました。舞台設定とは違う工夫がありました。音声から情景に入り込める子どももいるでしょうから、よい方法の一つだと思いました。

いろいろなことを学んだ学習だったと思いますが、ここで一つアドバイス。新聞紙衣装の制作時間を聞いてみたら、結構かかったようです。実際の現場ではそこまで時間をかけられないことが予想されます。今後はいかに手際よく制作するかということも大切になるでしょうね。



自校自賛



上記のとおりです。